書評：『中国の少数民族問題と経済格差』
大西広編著（京都大学学術出版会、2012 年）

張　　忠　任（島根県立大学）

本書は、大西広氏が16年間に渡って、新疆ウイグル族自治区を8回訪問して、中国の少数民族問題を研究する成果をまとめた力作である。

本書の「はじめに」には、1995年に経済体制の比較研究のため新疆大学を選んで長期滞在したことをきっかけに本書の主要な対象地域を新疆ウイグル族自治区にしたと語っている。参照地域としてはチベット自治区と寧夏回族自治区を選んでいる。研究対象となる少数民族については、ウイグル族をはじめ、チベット族、回族、そしてモンゴル族、朝鮮族、土家族などにもふれている。

大西氏がマルクス主義経済学者として唯物論の立場から経済土台が上部構造を決定する原理に基づくように、民族矛盾の本質を経済問題に帰結している。

氏はこの研究を進めるため新疆ウイグル族自治区から留学生を多数受け入れ、中国国内の研究者（新疆大学や北京大学など）の協力も得て、著者のうち新疆ウイグル族の研究者が4人おり、現地研究調査を通じて統計の欠如を克服し、統計的分析手法を用いて実証研究を行っている。

少数民族問題を経済問題として捉え、データに基づく実証分析を通じて論じることは本書の主眼となる。

本書の本文は、２部７章から構成されている。

第Ⅰ部は民族間の経済格差とその実態に関する研究であって、第１～３章からなっている。

第1章では、民族間の所得格差について民族地区県データをもとに述べるものであるが、経済格差の要点としての階級格差と従事産業間矛盾、および所得格差に関する先行研究と県データ利用の可能性と各種所得決定要因を考慮したうえでの所得格差を検討している。この章では、特に、従事する産業間の矛盾と民族間格差に関する分析では、各民族の人口が各産業に占める比率を考察すると、チベット族とウイグル族の第一次産業比率が圧倒的に高いこと、モンゴル族がそれに続いて高いこと、ただ、それに代わる第二、三次産業比率では第二次産業のほうは格差が大きい。また、回族の産業間比率は漢族とそう変わらないこと、朝鮮族になると第一、三次産業で比率が逆転していることを明らかにしている。

第2章は民族自治区農村の生業と民族間格差を考察している。新疆自治区における「漢族農業地区」としての兵団と少数民族農業の分析では、生産関数推定による技術非効率性の比較について、二つのモデルを通じて、少数民族農業には兵団農業と比べた遅れがあることを確認しつつも、兵団農業に対するキャッチアップが進んでいることを示している。南新疆貧困地区における農家経営の実態についての考察では、民族配置と貧困問題をもとに、調査の概要とデータの性質、農家経営の状態と農家収入を決める諸変数を検討し、「食不足期間」と生産量、現金収入および家族人数との関係、そして「貧困の原因」についての農家の回答傾向、最終学歴と農家経営方法の関係を分析した結果、農業所得拡大の限界を認識し、ほかの職業への移動が必要であると結論をつけている。最

後に、参照地域として寧夏自治区東部貧困県の平均的回族家庭の生活状況に関する調査結果をもとめている。

第3章では少数民族の労働移動と労務輸出を考察し、新疆カシュガル（喀什）地区およびコナシェヘル（疏附）県における労務輸出の実態について、外出労働力の所得と福祉、カシュガル（喀什）地方政府による省外労務輸出組織の実際、南新疆からの他省向け労務輸出において注意すべき問題点、民族地区から外地に流出する少数民族について調査したうえで、民族別の労働力外出率を推計し、「労働力外出率」と民族のアクティビティーを検討し、労働力移動パターンを分析し、特に漢族、チベット族、チワン族が「務農」に、朝鮮族とモンゴル族は「経商」にウエイトがかかっていることを析出している。

第Ⅱ部は、民族企業家はどこまで成長しているかについて論述して、第４～７章の４章からなっている。

第4章では、民族企業家の相対比率について新疆自治区企業データをもとに分析し、設立年、地区および業種上の特徴、企業規模と所有制に関する諸特徴について考察している。

第5章は企業家精神と企業規模・形態に関する研究である。寧夏自治区における企業家精神の民族間比較については、回族の現状に関するいくつかの評価、データの概要と分析方針を検討し、民族間格差は地区間格差、学歴間格差、世代間格差および職業間格差との関係を解明している。特にここでは統計表の性質から「分割表」を用いたχ^2検定や相関係数の大きさを比較する方法に問題があることを確認したことから、それに代わる方法を生み出しているところが注目される。通常使われない複雑なさまざまな統計的検定も使われているが、それだけ厳密な分析がなされているということになる。そして、その結果、寧夏自治区における民族的な差異は総じて大きくないこと、具体的に言えば、民族的な差異に見えるものの本質は地域差や学歴や職業上の差であるという結論を導いている。次の節では五峰土家族自治県における民族企業と漢族企業のパーフォーマンスを生産関数推計という方法で分析した結果、漢族に言語的なハンデがなく、かなり同化された土家族には、漢族と大差ないパーフォーマンスを実現できているという結論をつけている。

第6章では、少数民族企業家の生成について聞き取り調査から析出した結論を中心に述べている。新疆自治区における少数民族企業家に関して、アルマン（阿爾曼）実業有限公司の成立と発展、対ロシア貿易から発展した企業を取り上げ、そこでの企業家精神形成の条件を分析している。また、チベット族地域における民族企業家について、地域特性を活かした民族企業の生成と発展、チベット医学・薬学企業の成長、ホテル業界における民族企業と漢族企業、漢族企業内における民族企業家の生成を考察している。

第7章は少数民族の政治的地位と教育言語問題を検討している。政治的地位の問題については甘南チベット族自治州夏河県の指導層の民族バランスを事例として分析する一方で、教育言語問題については新疆大学を事例として「民考漢」[1]と「14番目の民族」としての「民考漢」の問題、双語教育モデルの転換、学生の学科分布に見る民族特性を明らかにしている。また、ここでは、特化係数で定義した学科集中度を用いて「漢語クラス」、「民考漢」、「実験クラス」、「民考民」[2]という4つのグループが21学科のどこに集中するのかを解明している。そして、その結果、いくつかの特殊の学科を除く17学科については各クラス間の相関係数を調べたところ、「漢語クラス」と「民考民」との距離が最も遠く、「民考漢」は民族語を話すグループより漢族の学科分属にずっと近い構造を示していることを明らかとしている。

補論は、チベット問題への試行的アプローチについて述べている。二つの付表ではそれぞれ、第2章第2節に使われるデータ：南新疆地区の調査

農家の現況、補論3に使われるデータ：那曲地区「夥爾39族」戸数近230年の変遷及び分布状況をまとめている。巻末には項目索引も付いて、大変に便利な本である。

本書の客観性については、現地研究調査による社会的事実と文献資料に関して実証に徹したことにある。

本書はできる限りのデータに基づき統計的分析手法を尽くした研究書である。統計学の応用にとっても、研究手法の多様化にとっても重要な意義があると思う。

そして、本書は理論と実践を両立させたものである。特に、中国国内の関係研究書、例えば龍永蔚主編の『中国少数民族経済研究導論』（民族出版社2004年版）と比べても、本書のほうが一層現実的問題に接近することを感じさせられる。

「仁者見仁、智者見智(物ごとに対する見方は人によって異なること)」と言われるように、極めて資料収集の困難な中国の少数民族研究に対して、よくぞここまで多くの貴重な資料を集めることができたものだと著者の「苦心の跡」を知ることとなる。そして、これは、もちろん本書の大きな貢献となるだけではなく、むしろ他所とは一線を画して民族問題をもデータに基づいた統計的分析ができることを示したことが意味深い。特に第5章における企業家精神に関する統計分析手法は開発的であると高く評価できる。

ただし、問題もある。たとえば、大西氏は統計学の専門家として使用した統計分析手法の説明が丁寧でない部分がある。読者として想定される一般研究者向けの詳細な説明が必要であるかと評者は考える。例えば、興味津々の第3-2-4表（各民族別の労働力移動パターン）は少し分かりにくかった。また、いくつかの標本サイズは小さすぎる。例えば、2×3分割表である第2-2-12表のデータはn＝47にすぎない。これらの点については、改訂の際には補足してほしい。

もう一点は、新疆の経済格差問題は産業構造にもかかわることである。本書の第1章第1節では、従事する産業間の矛盾と民族間格差について考察し、三次の産業構造について論じているが、もし産業連関表を用いて分析したら、n`産業まで研究をさらに深めることができる。雪合来提・馬合木提（2000）と阿不力米提・克力木（2006）はすでに新疆ウイグル自治区経済の産業連関表の利用可能性を示しているので、今後の発展を期待する。

また、本書の構成については、第6章は統計的分析が乏しいので、ページ数が同様に少なく内容も関係ある第3章と一体化した方がバランスがとれたのではなかったか。

ただし、これらの点は評者の望蜀の念を独白したにすぎず、本書の価値は何ら損なわれるものではない。

日本では、中国の少数民族に関する著書は少なく、そのうちのほとんどは文化や教育に関するものであって、特に経済的視角から新疆ウイグル族や新疆ウイグル自治区を中心に研究したものとしては、いくつかの論文を除いては、著書としては本書が開拓的な第一冊になったものと思われる。

本書は実証分析が豊富な研究書として、その内容を十分に理解するには、統計的分析手法をあらかじめ了解しておく必要がある。

中国の少数民族問題に関心を持つ方にとっては、本書は経済的視角から統計学の分析手法を用いて研究し、それによって重要な知見を提供、またさまざまな啓発を与えてくれる好著である。ぜひ多くの読者に一読をお勧めしたい。

参考文献

雪合来提・馬合木提、2000、「新疆ウイグル自治区を編入した中国9地域間産業連関表の作成」、『経済論叢別冊調査と研究』（京都大学経済学会）、第29巻。

阿不力米提・克力木、2006、「新疆ウイグル自治区経済の産業連関構造と成長要因」、『国際開発学研究』（拓殖大学）、6(1)。

注

1　これは大学入試を漢語＝中国語で受験するウイグル人のことを指す。一般的に言えば、「民考漢」に適するのは11の少数民族である。

2　ここで、大学入試をウイグル語で受験するウイグル人のことを指す。